

北海道立市民活動促進センターは、営利を目的としない、地域の様々な課題を自ら解決しようとする道内の市民活動を応援しています。

## 特集

### 道内で活躍する市民活動を紹介します

平成 25 年度の当センター事業で、道内で活躍している市民活動団体の活動を集録した「活いきまちづくり～北海道の市民活動レポート 2013」(当センターホームページで閲覧できます)を作成しました。その一部を抜粋して順次ご紹介しています。

今回は「NPO法人ネイティブクラーク(旭川市)」「函館圏フリースクールすまいる(函館市)」「子育て応援隊にじまる(芽室町)」の3団体の活動をご紹介します。

#### NPO法人ネイティブクラーク(旭川市) ～ 馬を利用して自然保護と社会教育事業 ～

「みんなが使っている川、今日はその川をきれいにしましょう。そうしたら、ご褒美として、ここに來ている馬に乗せてあげますからね」NPO 法人ネイティブクラーク代表の小野塚充男さん(通称クラークさん)が、旭川市の小学 5 年生の児童たちの前で、馬を指差した。

2013 年 10 月 15 日、旭川市街を流れる石狩川の河川敷。クラークさんを含め、ネイティブクラークのスタッフ合計 7 人が手伝いに來ている。

「では、ここから、あの橋の所までのゴミを拾いましょう」「タバコの吸い殻を、また見つけたよ」「空き缶もあるね」などとの子供たちの声が響いてきていた。

集めたゴミを前に、スタッフが写真や画用紙に描かれた絵を掲げて語りかける。写真には、不法投棄された家庭ゴミ、家電製品、自転車などもある。



不法投棄されたゴミについて、写真を  
使い児童たちに説明するスタッフ

「どうして、川べりにテレビが落ちて  
いるのかな？」その  
問いかけに、子供た  
ちは答える。「大人は

ずるいから」「ゴミを捨てるのにお金がかかるから」  
「川は広いから少しぐらいなら平気だから」

「では、川は  
みんなの飲み水  
にもなっている  
のに、ゴミが捨  
てられるのはど  
うしてでしょ  
う？」



児童たちに向かって川の大切さを説明する  
クラークさん

#### ■ 自然への恩返しでゴミ拾いを

クラークさんに、尋ねてみた。「どうして、このよ  
うな活動を始めたのですか？」

「河川も山も、使わせてもらっているの  
で、その恩返しのつもりで、ゴミ拾いをやろうと思  
ったのです」馬を使う理由については、河岸だと馬  
に乗ってゴミを拾った方が、やりやすいと考  
えたから。「それが、子供たちにも乗せてあげ  
れば……となり、ご褒美に乗馬してもら  
う、といった今の形式になったの  
です」

東京生まれのクラークさんは、自衛隊員や教材販  
売会社経営など様々な仕事を経て、1996 年に旭川  
市郊外の原野を購入、自然に囲まれた豊かな生活  
を求めてホースガーデン(観光牧場)をスタートさせた。

## NPO法人ネイティブクラーク（旭川市）

「ホースガーデンは、観光牧場であるが、観光地ではない」というのがクラークさんの信条。観光バスが入るような駐車場は作らず、建物も古い農家を改築し、廃材を使ったりして、スタッフの手作りで牧場を完成させた。こうした取り組みが認められて、旭川観光協会の観光顕功賞も受賞している。

### ■ 乗馬仲間 13 人でNPO法人設立

2003年、自然保護と保全運動を目的に、乗馬仲間13人でNPO法人ネイティブクラークを設立。翌年、「森林愛護騎馬隊」として上川南部森づくりセンターから認められ、山火事注意の喚起やゴミの不法投棄パトロールを実施。2005年には、「河川愛護騎馬隊」として旭川河川事務所より任命されたことから、名称を「大雪愛護騎馬隊」に統一。地域の環境保護運動に加え、馬を利用した社会教育事業を展開した。

その他、旭川近郊の親子を対象とした「センス・オブ・ワンダー」も開校。この事業は、農林水産省の支援事業。自然の魅力や不思議に触れ、子供の感性を豊かにして親子の絆を深めるといった活動である。また、市民を対象に「馬学入門講座」を開催し、生涯学習の機会を提供するとともに、自然保護を訴えている。

現在、NPO法人の中心メンバーは5人。ボランティアスタッフとして十数人が登録され、活動ごとに参加できるメンバーが現場にかけつける。

活動費は、寄付金や会費、助成金で賄われている。これまで、河川愛護活動事業（河川環境財団）や農村振興景観パイロット事業（農林水産省）、青少年育成事業（JT）などから助成を得ている。

### ■ 動物とふれ合い、自然と向き合う

「では、実際に馬に乗りましょう」ゴミについての勉強の後は、お楽しみの乗馬。子供たちが一斉に馬のそばに走り出すと、クラークさんが小声で話してくれた。「だいたい、一人ぐらいいは、馬に乗りたくないって、拗ねる子供がいるのだけど……その子供をいかに馬に乗せて楽しませてあげるかがポイントだね」子供たちを順番に乗せ、河川敷をゆっくり

と一周する。子供たちは初めての体験に興奮していた。



嬉しそうに馬にまたがる児童たち

引率の高田秀人教諭は、「この活動の前に、授業で川についての学習や、水質調査なども行っていますので、河川について興味を持ってもらえると思います。児童たちは馬に乗れるのが嬉しいです、川の勉強にもなります」と語る。

コーディネイトを担当しているボランティアスタッフの女性は、「子供たちに『川の町、旭川』を知ってもらいたいのです。そばに、自然の教



動物とのふれ合いが大事だと語るクラークさん

材があるのですから、もっと川を取り巻く状況を分かかって欲しいのです」と、その思いを話してくれた。

最後に、子供たちに向かって話す。

「馬に感謝の気持ちで、草を摘んできて食べさせてあげて。草はクローバーが好きかな。とくに4つ葉のクローバーね。馬は、言葉がなくても人間の気持ちが分かるから。心を込めて草を食べさせてあげて」

クラークさんは、馬の背をゆっくりと撫でる。子供たちに動物と触れ合うこと、自然と向き合うことの大切さを教えていた。

### ■ 連絡先

〒078-8204 旭川市東旭川町桜岡160-4  
NPO法人ネイティブクラーク  
代表 小野塚 充男（おのづか みつお）  
TEL/FAX：0166-36-5963  
E-Mail：info@nativeclark.org  
URL：http://www11.ocn.ne.jp/~clark/sow/

## 函館圏フリースクールすまいる（函館市）

### 函館圏フリースクールすまいる(函館市) ～ 子供たちに居心地の良い場所を～

いじめの問題や、心の病を抱えた子供たち……

受験戦争や管理教育の影響で、子供に対するストレスは計り知れない。そういった原因から不登校児が社会問題化して以降、その対処や指導は有効な対策を見いだせない。全国で12万人。北海道で4100人（文部科学省学校基本調査2010年度調査）。こうした子供たちは、行く場所がない。

こうした子供をサポートしたいと立ち上がったのが、「函館圏フリースクールすまいる」代表の庄司証（あかし）さん（33）だ。心地よい居場所を提供できればと、2012年4月、函館市内にフリースクールを開設、子供たちを支援するスペースを作った。

#### ■ 不登校児の受け入れ場所がない

庄司さんは、北海道教育大学大学院を修了後、七飯町のフリースクール「チーフキリスト教学園」で勤務、10年間の経験を持つ。さらに、同教育大学函館校の非常勤講師も務める専門家でもある。



マン・ツー・マンで教えているフリースクールの様子

フリースクールを始めようとしたきっかけは、そのころの函館市内に不登校の生徒を受け入れるスペースがなかったからだという。

「子供は、学校になじめなければ、家庭に居場所を求める場合がおおいのです。平日の昼間、小学生が一人である場所はありません。特に小さな町ではなおさらです。そんな子供たちのために、新しい居場所を作ってあげることが必要です」

#### ■ 着実に成果、半数が復帰

不登校の子供たちのために「函館圏フリースクールすまいる」を設立、函館市地域交流まちづくりセンター（末広町）で、交流の場を設けた。2013年4月には、同センターだけでは、手狭になったため、

一軒家を借り上げて移転、同時にプログラムも拡充させた。受け入れ体制を、月曜日から木曜日の週4回、時間も午前10時から午後3時までとした。交流ができるフリースペースのほか、高校卒業資格の取得を支援するフリースクール、不登校に関する個別相談、訪問サポートなども始めた。



函館市大手町にあるすまいるの事務所

2013年9月現在、支援している子供の数は15人。フリースクールに2人、フリースペースに9人が登録、4人に相談サポートを行っている。常勤スタッフは、庄司さんを含めて4人、ボランティアスタッフ6人がおり、充実した体制となっている。

こうしたことから、着実に成果を上げ始め、利用者の追跡調査によれば、約半数が進学や学校復帰、5分の1がすまいるを継続、4分の1が不登校に戻っていると報告されている。

さらに、北海道渡島・桧山地域における生活保護世帯の子供を支援するためのプログラム「子ども健全育成支援事業」の委託を受け、同地域の子供たちに対して訪問サポート、メールや電話でのサポートを行ったりしている。

さらに、北海道渡島・桧山地域における生活保護世帯の子供を支援するためのプログラム「子ども健全育成支援事業」の委託を受け、同地域の子供たちに対して訪問サポート、メールや電話でのサポートを行ったりしている。

庄司さんによれば、フリースクールの月謝や50人の賛助会費（年間1000円から）で、なんとか事務所の家賃が支払えるほどという。

子供たちを受け入れるにあたって、注意すべきことを尋ねると、「放置ではなく、見守るという姿勢が必要なのです」庄司さんは断言する。フリースペースに来る子供は、基本的に何をしても構わない。「最初は、黙って座っているだけでも、だんだんそこが安心だと分かると、ゲームをするようになります。さらに、子供同士で互いに言葉を交わし、そして一緒に遊び出すのです」

#### ■ 不登校の苦しみを知るスタッフ

すまいるが、子供たちの憩いの場になっている理由の一つに、スタッフの熱意もある。



## 函館圏フリースクールすまいる（函館市）

土居百合亜（ゆりあ）さん（25）は、自分自身も学校でいじめにあって不登校を繰り返していた。だからこそ、同じような境遇の子供たちと真剣に向き合いたいと、スタッフになった。

「以前の私は、学校にも行けず、部屋にこもって、食事も摂れず、自殺ばかり考えていました。そのとき 10 キロ以上も痩せてしまい……夜中に台所に降りていってずっと包丁を見つめていたこともありましたね。ですから、不登校の子供の気持ちがよく分かるのです」

また、田中透さん（29）は、庄司さんから直接スタッフに、と誘われた。高校卒業後、統合失調症と診断され、自宅に引きこもっていた。25歳のときにアスペルガー症候群と診断され、デイケアに通所していた経験を持つ。

「最初は子供たちと接するのは不安でしたが、どうすればいいのか、徐々に分かってきました。聞き役にまわって、見守るみたいなことが分かってきたのです。自分は、社会からズレてしまったので、そ



フリースクールをもっと充実させたいと意気込むすまいる代表の庄司証さん

### ■ 他の支援グループとも連携して活動

すまいるは、他の支援グループとも連携して活動を行っており、不登校の子供を抱える親が中心に活動している「函館アカシア会」とのつながりも深い。

そのアカシア会の昼食会がすまいるのフリースペースで行われ、不登校児の親や、庄司さん、すまいるのスタッフらが出席して、登校拒否と教育に関する意見が交換された。

この席で、アカシア会の代表者で、すまいるの副代表も務める野村俊幸さんが話していた。野村さん

もまた、不登校だった娘を抱えていた。

「学校の勉強は、子供の教育にとってほんの一部でしかないのです。

家の手伝いや礼儀作法、子供にはいろいろ学ぶことがあるはず。その一部の勉強だけができないと、子供を全否定することはないはず」

「私の娘二人ともが、不登校となったのですが、次女が『もう学校に行かない！』と言い出したとき、正直ほっとしました。無理して学校に行ってストレスを溜めるよりも、いっそのこと行かない方が、いいと思いました。学校に行けなくなった子供たちが、撤退する場所、一時退避する場所が、今の日本にはないのだと思います」

野村さんは、不登校に対する知識が以前の自分には無かったと悔やむ。その時の反省、懺悔の気持ちで、こうした活動を続けているという。

### ■ フリースクールが認知される社会へ

すまいるの今後の目標について、庄司さんは、現在行っている高卒認定支援の学習支援を、小中学生対象まで広げたいと意気込む。さらには、フリースクールが社会的にもっと認められるようにしたいと、大きな目標を語る。

「そんな社会になれば、保護者や教師が、子供に対して、『それじゃ、フリースクールはどう？』とすんなり勧められるはず。そうなれば、子供たちも安心できますよね」



不登校児の親の会「函館アカシア会」との合同昼食会

### ■ 連絡先

〒040-0064 函館市大手町 9-13  
 函館圏フリースクールすまいる  
 代表 庄司 証  
 TEL：080-4349-6463（10時～15時）  
 FAX：020-4665-2265  
 Email：akashi.shoji@gmail.com  
 URL：http://hakodate-smile.jimdo.com/

## 子育て応援隊にじまる（芽室町）

### 子育て応援隊にじまる(芽室町) ～ “つらかった”子育て実体験を 悩めるママたちのために ～

芽室町内にある保健センターの一室に幼児から小学生の子供たちを連れた母親たちが集ってきた。「誕生学」という耳慣れない言葉をテーマにした講座を聴くためだ。誕生学とは、妊娠・出産の知識や命の大切さを伝える生涯学習プログラム。10組の親子が、講師で誕生学アドバイザーの高田めぐみさんの話を静かに聴き入っていた。

お腹の中で赤ちゃんが大きくなる様子を、子供にも理解しやすいよう易しい言葉で語りかけ、人形や骨盤の模型を使ってどのように命が誕生するかを説明する。「お母さんの命の部屋の中で命が始まったときには、どれぐらいの大きさ？」と高田さんが質問すると、子供たちは「これぐらいの大きさ」と手で示す。高田さんが赤ちゃんの大きさをお米や、紙に針の糸を通した穴の大きさであることを示すと「小さい」と子供たちもびっくり。赤ちゃんが生まれるまでをドキュメンタリーで追った育児DVDでは、赤ちゃんが生まれる瞬間の映像に「わー、すごいね」と声をあげていた。

こうした講座を「きらきらママ講座」と題し、開催しているのが芽室町内の子育て支援団体「子育て応援隊にじまる」。2012年の11月に設立され、メンバーは代表の嶋野奈津美さんを含めた芽室町在住の3人。3人とも子供がいる専業主婦で、嶋野さん自身も1、3、6歳の子供がいる。

「きらきらママ講座」は母親や妊婦に向けたもの。嶋野さんたちが、公益財団法人キリン福祉財団の「キリン・子育て公募事業」にお応募したところ助成が



助産師さんを講師に招いた出産についての講座には若いママたちの姿も

決定。

2013年度に年間30万円の助成金を得たため5月から1回のペースで

定期的を開催している。参加費は1回300円から500円ほど。

#### ■ 妊娠中からのお友達づくりの場にしてほしい

以前から嶋野さんは子育て支援活動に熱心だった。それは2009年にさかのぼる。ボランティアで10人ほどの子育て支援サークル「なごみ」をつくり、町からの助成金をもとに活動していた。ボランティアで製作していたイベントカレンダーを4年間担当。その後、「なごみ」は解散してしまったが、この活動に思い入れが強かった嶋野さんは活動を継続、個人で誕生学の講演会を開くほどだった。

そもそも、子育て支援活動を始めたきっかけは、自身の「すごくつらかった」子育て経験から。鹿児島出身の嶋野さんは、知り合いもなく頼る実家もない。お産で体力にダメージを受け精神的にも落ち込んでいた中で始まった不眠不休の子育て。

「日中は話す相手もなく、もくもくと子育てをしていることがつらくてきつかったですね。それが同じようなお母さんの仲間ができてから、子育ての負担がスーッと軽くなったのです。私が経験したこんな気持ちを子育てでつらい思いをしているお母さんたちにも伝えたいと思い、妊娠中からのお友達づくりの場になればと活動を始めました」

前述の誕生学は、嶋野さんに2人目の子供がお腹にいたとき、上の子供から「赤ちゃんはどこから来るの？」と聞かれ、返事に窮したことが始まり。たまたま新聞の記事で誕生学という言葉を知り、実際にその講座を聴きに行き、感銘を受け、みんなに広めたいと感じたという。



きらきらママ講座の命の話には子供たちも真剣に聞き入った

## 子育て応援隊にじまる（芽室町）

講座に参加する母親のために同じ芽室町の子育て支援組織「育児ネットめむろ」に託児を依頼、「託児は小さな子供をもつ母親にとって悩みの種。参加者の中で申し込みがあった方には低料金で利用してもらい、ママだけでゆっくり話を聴けるように工夫しています」

そのほかにも予防接種の内容を掲載して日程を書き込める欄などを設けた「めむろ予防接種スケジュールシート」を制作し町内に配布。これも嶋野さんが予防接種の日程調整の難しさを感じ、自作していたものを使ってもらおうと企画したものだ。

6月に町内の小規模ホール「めむろ一ど」で行われたファミリーコンサートも、音楽に触れ合う時間がなかなか取れない小さな子をもつ親子に向けて昼に開催した。

このコンサートでは音更町出身で女性シンガーソングライター、流(ながれ)さんが演奏し、スライドに絵本を映し出しながら朗読を行った。親子 77人が集まるなど盛況だったが費用は、町民活動支援センター「めむろまちの駅」の助成金とチケット代、大人1人1000円(子供は無料)ですべてまかなった。

「コンサートは夜に行われることが多いのですが、3歳までの子供を連れて夜に外出するのは難しい。外出できたとしても後ろ髪ひかれる思いになります。子供と一緒に日中リフレッシュして欲しいという気持ちを込めてお昼に開きました」

### ■ 子育てと活動の両立に悩み

活動を続けていく中で課題の多さにも気づいたという。働く妊婦も参加できるようにと講座の日曜開催も実施したことがあるが、「土日は主人が家にいて外出が難しい」とそれがかえってネックとなったことも。妊婦を対象にした講座を予定しても、期限が迫っているのに肝心の妊婦が集まらず、急遽母親も対象に加えたこともあった。

「インターネットで『妊婦、イベント』と検索すると『土産』という言葉がたくさんでてきます。妊婦のイベントには、企業も宣伝も兼ねておむつの試供品やパンフレットを袋に詰めてお土産として渡す

ようなのです。そういうことがないと妊婦さんはなかなか参加しないということもわかりました。イベントを企画するときは色々考慮しなければいけないと感じました。ホント課題だらけですね」



流さんを招いたファミリーコンサートには沢山の親子が集まった

嶋野さんにとっての悩みは、手伝ってくれる母親たちが少なくなってきたこと。「にじまる」を存続するかどうかにも迷いがあるという。

『にじまる』を立ち上げてから様々な活動をしてきましたが、子育て支援活動は子供が巣立つにつれて母親も仕事を始めたり、子供が小学校にあがると、学童保育の手伝いをしたりして幼児のための活動をする人が少なくなるのです。今は、メンバーが足りず忙しくなりすぎて私自身の子育てがおろそかになっているのが悩み。子供が3人もいるから、もっとゆっくり自分の子育てに専念してもいいのかなという気持ちも出てきました」

それでも講座やイベントに参加した母親たちの感謝の言葉を聞くと、もうしばらく頑張ろうという気持ちになるそうだ。『ありがとう』、『助かっています』と声を掛けられると、やはり誰かがこうした企画を続けないと子育てで悩んでいるお母さんに救いの手を差し伸べられない」

迷う気持ちと寄り添いながらも嶋野さんは誕生学の講座を年1回にして活動を継続、「子供たちが巣立ってから本腰を入れたいですね」と語っている。

### ■ 連絡先

〒082-0813 芽室町東めむろ3条南1-2-11  
 子育て応援隊にじまる  
 代表 嶋野 奈津美  
 TEL/FAX：0155-62-6244  
 Email：satsuma5@amber.plala.or.jp



# インフォメーション

## ◆道立市民活動促進センター事業のお知らせ◆

### 協働促進講座「放射能被災地をとりまく現状と課題」が開催されました

平成 26 年 5 月 9 日（金）18:00～20:30 に、かでの 2・7、520 研修室にて協働促進講座「3 年から、次の協働へ～復興への取り組みから北海道の私たちはなにを学ぶのか～」が開催されました。

この講座は、東日本大震災から 3 年が過ぎ、復興に関わるさまざまな活動が次の段階に移行しつつある中で、長く短い 3 年をふりかえり、私たちは一体どういった局面に向き合ってきたのか、そこで何を学び、未来に活かしていけるのかということ、参加者の皆さんと一緒に考えていくための講座でした。

主催挨拶で開催目的などを話した後、基調報告として、国際協力 NGO センター (JANIC) 震災タスクフォース・チーフコーディネーターの田島氏から、「国際協力 NGO が進めてきた震災復興支援の意義」についてお話いただきました。



田島氏の基調報告の様子

田島氏からは、NGO が直面した根本的な課題として、

1. 高い制度障壁の存在
2. 災害に関わる専門的な常設機関の不在
3. 市民社会の参加が制度的に担保されていない
4. 官民連携の仕組みが弱い
5. 人道支援の国際潮流とのギャップ
6. 財政基盤と人的基盤が弱い
7. 原発リスクにグローバルに取り組む視点の欠如が挙げられました。



パネルディスカッションの様子

続いて、EPO 東北の井上氏から「被災地のいまと『3.11 あの時』からみえてきた中間支援組織にあり方」を、震災発生直後に札幌で立ち上がった「東日本大震災市民支援ネットワーク・札幌 むすびば(2014 年 3 月末に発展的解散)」及び、2013 年 12 月に設立された「NPO 法人みみをすますプロジェクト」の事務局長を務める東田氏から「むすびばの 3 年から 次の 3 年へ」として、2つの現場からの報告がありました。

その後、パネルディスカッション「危機的な変化に対応するしなやかなコミュニティへ」へ展開しました。

コーディネーターは酪農学園大学教授の金子先生が務め、田島氏、井上氏、東田氏と会場の参加者との活発な議論がなされました。

最後に、共催の環境省北海道環境パートナーシップオフィスより、検証や課題整理は次の 3 年に向けて、必要なこと。

ただ、今は避難者支援をすることが、まず重要で培ったノウハウや課題を整理し、発信していく余力はない。

ただ、とても重要なことだとは分かっている。そのために中間支援組織の協力が必要であると挨拶がありました。

今後は、北海道の市民団体が行なった震災支援の課題整理に対して、中間支援組織の新たな協力の動きが生まれる場になると、確信できた講座となりました。

## ◆ 助成金情報 ◆

## ●公益財団法人 北海道地域活動振興協会●

## 「平成26年度 ボランティア活動支援事業」

北海道内でボランティア活動を行う団体を対象に上限3万円を助成いたします。助成団体数は道内200団体を目標としています。

■助成団体数は次のとおりです。

札幌市：32団体

道央圏（石狩、後志、空知、胆振、日高管内）：68団体

道南圏（渡島、桧山管内）：20団体

十勝圏（十勝管内）：20団体

釧路・根室圏（釧路、根室管内）：15団体

道北圏（上川、留萌、宗谷管内）：30団体

オホーツク圏（網走管内）：15団体

## ■募集概要

- ・4月からの事業も対象とします。
- ・申請書等を(公財)北海道地域活動振興協会へ郵送してください。
- ・募集期間は、6月17日から7月31日までとします。(当日消印有効)
- ・各圏域等ごとに選考し、助成団体を決定します。

## ●公益財団法人 北海道地域活動振興協会●

## 「平成26年度まちづくり推進活動支援事業」

活力のあるまちづくり活動の振興を図るため、行政とのパートナーシップにより、新しい時代に相応しいネットワークづくりをめざした活動に対し助成いたします。

■助成額等 上限30万円、14団体を目標とします。

## ■対象事業

市町村、道、国とのパートナーシップにより、新しい時代に相応しいネットワークづくりを目指す次の事業。

ア 地域の素材を活用し、広く住民の参加を得ながら進める地域活性化の取組

イ 先進事例を参考に、住民のさまざまな知恵や工夫を反映させながら進める地域活性化の取組

## ■対象団体

道内に住所又は活動の本拠を有し、道内で地域活動などを1年以上継続して実施している団体。

■対象期間 平成26年4月1日～平成27年3月6日

■対象経費 対象の経費は、次に掲げる経費を除きます。

- (1)人件費（講師等の謝金等は助成対象経費）
- (2)備品購入費
- (3)管理費（事務所借上料等団体の運営、管理にかかる経費）
- (4)食料費（事業で提供する食事の原材料費は含まない）

## ■申請方法

助成金申請書に次の書類を添付して提出してください。

- (1)団体の定款、規約等
- (2)団体の役員名簿
- (3)最近年度の事業報告書及び決算報告書
- (4)過去に実施した事業活動を紹介する新聞やパンフレットなど

■応募締切 平成26年7月31日（木）当日消印有効

## ●公益財団法人 北海道地域活動振興協会●

## 「平成26年度地域協働・連携活動支援事業」

この事業は、特色ある活動や社会のニーズを的確に把握した活動などを実践する団体が行う、ボランティア活動や地域づくりへの取り組みなどの公益的な活動に対し支援いたします。

■助成額等 上限10万円、10団体程度とします。

## ■対象事業

- (1)社会のニーズに迅速に対応しようとする事業
- (2)広域的な連携のもとに取り組む事業
- (3)地域の特性を活かした事業

## ■対象団体

道内に住所又は活動の本拠を有し、道内でボランティア活動などを1年以上継続して実施している団体で、かつ、特色ある活動や社会のニーズを把握した活動を実践している団体。

■対象期間 平成26年4月1日～平成27年3月6日

■対象経費 対象の経費は、次に掲げる経費を除きます。

- (1)人件費（講師等の謝金等は助成対象経費）
- (2)備品購入費
- (3)管理費（事務所借上料等団体の運営、管理にかかる経費）
- (4)食料費（ボランティア活動などで提供する食事の原材料費を除く）

## ■申請方法

助成金申請書に次の書類を添付して提出してください。

- (1)団体の定款、規約等
- (2)団体の役員名簿
- (3)最近年度の事業報告書及び決算報告書
- (4)団体が過去に実施した「特色ある活動」または「社会のニーズを把握した活動」の資料（新聞や雑誌の記事、パンフレット等）

■応募締切 平成26年7月31日（木）当日消印有効

## 掲載助成金の詳細・お問い合わせ・提出先は

〒060-0003

札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館西棟

公益財団法人 北海道地域活動振興協会

担当/山本・嶋田

TEL 011-261-0803 FAX 011-261-0837

助成金申請書・実施要綱等は同協会ホームページに掲載しておりダウンロードできます。

URL <http://www.fureaizaidan.or.jp>

今回の掲載情報以外の助成金情報や北海道庁からの役立つ情報なども随時更新中です。ぜひアクセスして下さい。

◎ 北海道立市民活動促進センターのホームページ

<http://www.do-shiminkatsudo.jp/>